現代の子どもたちの実態と求められる教育的支援

岐阜県スクールカウンセラー・スーパーバイザー
臨床心理士・公認心理師
川原　聡

不登校

（児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査，令和6年）

不登校（小・中）は353,970人

・12年連続増、過去最多

増加率は前年度比2.2%（小学校5.6%、中学校0.1%）と減少

・54.2%が年間90日以上の長期欠席

・「病気」による30日以上の欠席は109,435人に増加

・61.7%にあたる218,246人が学校内外で専門的な相談・指導を受けている。

＜不登校の定義＞

何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）。

不登校の児童生徒について把握された事実

（児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査，令和6年）

学校生活に対してやる気が出ない等の相談があった…　30.1%

不安・抑うつの相談があった…　24.3%

生活リズムの不調に関する相談があった…　25.0%

学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた…　15.6%

いじめ被害を除く友人関係をめぐる問題の情報や相談があった…　13.2%

親子の関わり方に関する問題の情報や相談があった…　12.6%

家庭生活の変化に関する情報や相談があった…　8.0%

障害に起因する特別な教育的支援の求めや相談があった…　7.5%

いじめの被害の情報や相談があった…　1.4%

不登校の変遷

1950年代～　家庭の問題

1970～80年代　学校の問題

1980～90年代　ストレスによる神経症的病理

1990～2000年代　社会の病理

2003年～　生き方の問題

集団に適応できない人

〇毎日・終日、集団の中で活動することが難しい人
　昔から存在した？　ようやく認められた？

〇コロナ禍の影響

〇「集団教育の義務」の在り方
　子どもは義務教育を受ける「権利」がある
　…子どもの「義務」ではない

発達障害

児童生徒の8.8%　（R4,文部科学省）

〇自閉症スペクトラム症（ASD）
　高機能自閉症、アスペルガー障害を含む

〇限局性学習症（SLD）
　読字障害、算数障害、書字障害など

〇注意欠如／多動症（ADHD）
　不注意優勢タイプ・衝動・多動優勢タイプ・混合タイプ

いじめ

いじめの定義（いじめ防止対策基本法，2013）

〇加害者も被害者も児童等であること

〇加害者と被害者の間に一定の人間関係が存在すること

〇加害者が被害者に対して心理的または物理的
　影響を与える行為をしたこと

〇被害者が心身の苦痛を感じていること

☆「一方的に」「継続的に」「深刻な」が削除された

認知件数は小・中・高・特では**769,022件**（R6年度）

（前年度比5.0%増・過去最多）

いじめの発見

いじめの発見のきっかけ

学級担任が発見

小学校…　%　中学校…　%　高校…　%

アンケート調査などにより発見

小学校…　%　中学校…　%　高校…　%

（文部科学省「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」）

子どもの自殺

○**令和7年の小中高生の自殺は532人**（過去最多）

○18歳以下の自殺は長期休暇明けに増加

＜取り組み＞

（1）学校における早期発見に向けた取組

（2）保護者に対する家庭における見守りの促進

（3）学校内外における集中的な見守り活動

（4）ネットパトロールの強化

子どもの自殺の背景

自殺した子供の背景（自殺理由に関わらない・複数回答可）

精神科治療歴あり…13.5%

進路問題…11.9%

独特の性格傾向…10.5%

不登校…9.9%

保護者との不和…9.9%

孤立傾向…8.3%

友人関係の悩み…7.9%

いじめ…2.0%

子どもの自殺等の実態分析
（文部科学省，2014）

インターネット依存

○「勉強や仕事といった生活面や体や心の健康面などよりも
　インターネットの使用を優先してしまい、
　使う時間や方法を自分でコントロールできない」状態

…ネット依存が疑われる中高生は約93万人と推計。

☆コロナ禍でインターネットの利用が増加

ゲーム依存

○ゲーム障害の定義（ICD－11：WHO国際疾病分類）

・ゲームをする頻度や時間のコントロールができない

・他の生活上の関心ごとや日常の活動よりゲームを選ぶ

・問題が起きているにも関わらず、ゲームを続ける

○重症度

・ゲーム行動により、個人・家族・社会における学業上・職業上の機能が十分に果たせない。

☆上記の4項目が12か月以上続く場合に診断する。

4症状があり重症である場合はそれより短くても診断可能

ネット時間とゴールデンタイム

＜ネットの使用時間＞

18時～20時	キッズタイム
20時～22時	中高生タイム
22時～24時	大学生・社会人タイム
0時～2時	大学生・社会人タイム
2時～4時	廃人タイム
4時～6時	廃人タイム

（久里浜医療センター　北湯口　孝先生による）

薬物依存

○10代における乱用の中心は
　「市販薬」

○自分で情報を得る子どもたち

○「絶対ダメ」だけではなく

（国立精神・神経医療研究センター　松本俊彦先生による）

教育機会確保法（2016年成立・2017年施行）

〇不登校の児童生徒が通いやすい公立の**教育支援センター**、
　特別な教育課程をもつ**不登校特例校**、民間団体の**フリースクール**など、
　学校以外の教育機会を確保する施策を国と自治体の責務とし、
　必要な財政支援に努めるよう求める。
〇**学校復帰を大前提**としていた従来の不登校対策を転換し、
　学校外での「**多様で適切な学習活動**」の重要性を指摘。
〇子どもたちの「**休養の必要性**」を認めた。
〇自治体に学校外施設などさまざまな**情報を提供**するよう求めている。

教育機会確保法の8つのポイント

①より良い学校づくり
②不登校を問題行動と捉えない
③社会的自立の尊重（子どもが進路を主体的に考えられるよう）
④民間連携
⑤学校内外の学びの場も整備
⑥一人一人にあった支援（休養の必要も考慮）
⑦夜間学校の設置
⑧様々な方が学べる環境づくり

COCOLOプラン

（誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策，R5年3月 ）

○**不登校により学びにアクセスできない**子どもを**ゼロ**に

○**校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）**の位置づけ

※クラスに入りづらい児童生徒が、落ち着いた空間の中で
自分に合ったペースで学習・生活できる環境

※自分のクラスと繋ぎ、オンライン授業やテスト等も受けられ、
その結果が成績に反映されるようにする

「関わり」が問われている

〇交友の局所化・マニアック化
　SNS・ネットでの交流

〇「友達」の定義の変遷

〇なるべく会わない・話さないサービス

関わりに関するコロナ禍の影響

○関わりが家庭に閉じ込められた
　バーチャルな関わりは増えた

○「何でもない時間」が激減

○オンラインミーティング
　ロビー活動ができなかった

現代の子どもの付き合い方

〇アバター化

〇話しやすいことだけ

〇面と向き合わない付き合い

☆一面だけの関わりの方が楽

その子はどんな子か…「語る」

〇何が得意で何が苦手か

〇何が好きで何に興味が無いか

〇何を重要視していて何に関心が無いか

〇「学校」「社会」の何に抵抗を感じたのか

関わりの立て直し

〇面倒くさい関わりをやり直す

　…大人から

〇個性を認めつつ、合わない人と関わる

　…大人から

☆**多くの大人が多くの子どもに関わる**枠組みを